

ヘレニズムの文化潮流と正統

94K094 齊藤豪芳

序論 今日におけるキリスト教の問題

今日、キリスト教の問題は私達東洋人にとって極めて重要である。これは、信仰の有無が重要であるという事を意味しない。キリスト教の思考形態、及びにその生み出す文明に関する知識が重要なのである。そして、その重要性は、冷戦の終結により急速に表面化してきている。

キリスト教の生み出した文明は、19世紀の産業革命を境に全世界に急速にその存在を浸透させてきた。そして、その産業革命から今日にいたるまで、このキリスト教に基盤を置く欧米の文明に対してチェック機関的役割を果たしていたのは、同じく欧米におけるキリスト教批判の中から生まれた社会主義及び共産主義思想であった。

しかし、その思想の象徴的存在であったソ連邦が崩壊した事により、共産主義は、急速に歴史の中に埋没しつつある。実際、今日共産主義を論評する時、ナチス・ドイツのそれと同様、これを扱下ろす事が一種の知的ステータスだと思われるくらいである。無論、キリスト教文明側に矛盾や社会的弊害が消失したわけではない以上、それに対するアンチテーゼとしての共産主義の思想的価値まで死滅したわけではない。共産主義思想が、元来反キリスト教・反資本主義に思想的出発点を置いている以上、キリスト教主義・資本主義の持つ醜悪の側面をうきぼりにするためには、共産主義は依然として有価値である。

ただ、この反キリスト教・反資本主義という共産主義思想の特徴は、共産主義思想の存在価値であると同時に限界をも指し示している。反キリスト教・反資本主義という事は、その思考形態及び価値判断があくまでキリスト教や資本主義を基準としている事であり、それは共産主義思想が広い意味ではキリスト教の産物である事を意味している。言うなれば、共産主義思想は、父親であるキリスト教思想を超克する事を目的に生じた、キリスト教文明にとっての鬼子のようなものである⁽¹⁾。そのため冷戦期における両者の関係は、基本的にオール・オア・ナッシングであり、そこには共存という発想は生じる事があまりなかった。ましてや共産主義国家がほぼ自壊の形で崩壊しつつある今日、共産主義思想のキリスト教主義思想に対するアンチテーゼとしての学識研究が、その声量において低下しつつあるのは否定しようのない事実である。つまり今日の世界状況では、キリスト教主義思想が唯一人勝利宣言しているような状況なのである。

こうした思想の一極化は、人類の今日までの歴史を顧みて好ましい状況とは言えない。古来（2～3世紀）より、唯一の神、唯一の救済というのは、カトリックの典型的な題目であったが、それは、歴史上において十字軍に見られるような醜悪な結果をもたらした事もある。キリスト教世界に関わらないところでも、大正末期から昭和初期までの日本、現在の北朝鮮に見られるように思想の一極化は、その思想の真理と事実の間に矛盾が生じると力によってその思想の真理を擁護するという結果を常にもたらしてきた。唯一の真理のもたらす唯一の思想という発想は、基本的に全否定の対象としてでしか異端の存在を容認しない。またこうしたものが世界において一般化すると、それは無意識の独裁という独裁状況の永続化を意味し、人間を能動

的に行動する生物から奴隷に貶めるものである。こうした状況を現出する思想の一極化を防ぐために、私達は共産主義思想にかわる新たなキリスト教・資本主義思想に対するアンチテーゼの存在を必要としている。そういった意味で東洋の存在は重要である。

思想というものは人間の価値観というものに大きく影響されている事から、異なる思想に対し理解を深め共存する事は人によっては難事である。宗教は超越的存在を思想の素材とするため特にその傾向が強い。結果として主張合戦の末に相手の消去に動く事が多い。キリスト教文明と東洋の文化群はその成立・発展過程を異とするため、主張合戦に終始すれば双方に接点が存在するはずがなく、最悪の結果を招来しかねない。つまり、私達東洋文化圏に属する人々は、信仰する、しないにかかわらずキリスト教の知識と理解を必要とされているのである。そういった意味で特定の宗教に肩入れをする事の少ない日本人は、東西の思想を分析、相対化のしやすい立場にあるといえる。つまり日本は両者の触媒となるのに最もふさわしい国だといえる。とはいっても人間が何故宗教を必要とするのかという点はずしてしまえば机上の空論となるため、日本人の宗教に対する理解の必要性はいささかも減じない。

この論文はこういった事を踏まえて、キリスト教の本質とは何か、という事を自分なりに考察したものである。キリスト教の特徴として、教義の統一性が例外的に高い点があげられる。特にローマ帝国における公認化からルターの宗教改革までは完璧に近い統一性を保ってきた。また諸派に分かれた今日においても、旧・新約聖書が聖典である事、イエスがキリストである事、教会組織の存在など原則的な事においては一致していると言っている。しかし公認化されるまではどうであったのだろうか。私達は初期キリスト教の教父達の反駁書等の文献群により多くの異端異教の存在を知っている。それらの文献群はキリスト教がその初期段階において多くの異なる教説が存在していた事を示している。しかし、そういった人々の文献群は、後に正統派を形成した人々のもとで破棄され、これまでは現存する教父の著作からその教説をうかがう事しかできなかった。したがってこうしたキリスト教の成立期の原資料は、ほとんど空白に近い状態であった。しかし今世紀に入りクムランヤナグ・ハマディにおける考古学的発見により、失われた原資料が日のもとにさらされる事になった。これらの文献群の発見によりキリスト教が成立したあの時代にどんな思想が存在したかがこれまでより正確に分析する事が可能となった。またこれらとの比較によりキリスト教が成立期においてどういった運動であったのか、その時代を生きたイエスの残したとされる語録にある思想がどんなものであったのかがより鮮明化されるだろう。さらにそれらは今日のキリスト教がどういったものかを明らかにするためにも有効だろう。こういった事からこの論文では公認化されるまでのキリスト教に特に焦点を合わせて進めたいと思う。

1章 キリスト教成立期の歴史的状況～ヘレニズムの文化的特徴～

キリスト教は、その生誕から教義の一定の確立まではほぼローマ帝国の枠内で成立している。そのローマ帝国はヘレニズムの時代の只中に在るので、キリスト教はその成立期において時間的にも位置的にもこのヘレニズムの影響下に存在していた事になる。したがって、このヘレニズムという時代の文化的特徴を考察する事は、キリスト教の本質を考察する上で重要な位置を占める。

ヘレニズムが後の西洋思想に大きな影響を与えた事に異論を持つ者はまずいないだろう。この西洋思想の一大転換期を現出させる直接的なトリガーとなったのがアレクサンドロスの東方

遠征である。彼の東方遠征は、アケメネス朝ペルシアという当時の最大統治領域をはこる大国を滅ぼしたが、これ自体はさほど重要ではない。当時、アケメネス朝ペルシアでは内乱が続発しており、各知事の忠誠は王家から離れていた。アケメネス朝の滅亡は、アレクサンドロスの征服というより、ほとんど自壊に近い状態であったのである。

では彼の遠征のどのあたりに重要性があったのか。それには二つの事柄があげられる。まず一つはギリシアの各ポリスの独立性と独自性を崩壊せしめた事、そしてもう一つにはギリシア人を東方移住させ、国内における東西の壁を廃し、文化的に統一性の高い国家を現出させようとした事があげられる。では、こうしたアレクサンドロスのもたらしたものがヘレニズムの文化的特徴にどんな影響を与えたのだろうか。

まず、ギリシアの各ポリスの独立性・独自性を崩壊させた事から、ギリシア哲学の思想対象、もしくは価値基準が、集団から個人に取って代わられた事が重要である。ギリシア哲学の思想対象のおおまかな分類としては、物・存在・倫理的人間の三者に分けられる。その中でも特に倫理的人間の追求は、ソクラテス以来、ギリシア哲学における最も重要な論題であった。ヨハネ福音書の序文に見られるようにキリスト教において重要な論題となったロゴス概念も、ヘラクレイトスの物に対する分析が倫理的人間の追求というものの中から生まれたという事による影響を受けたという事は⁹⁾、教会史家W. ウォーカーによって指摘されている通りである。つまりギリシア哲学にとっては、すべての論題が良い人間とは何か、という問題に流れついたのである。

アレクサンドロスの東方遠征までギリシア哲学においてこの良い人間であるという事は、良い市民であるという事に完全に直結していた。プラトンの著作である「国家論」はこれを最も如実に著したものの一つであり、その内容は極めて倫理的で、題名から受けるような政治技術に関する書物では必ずしもない（この書物に限らず国家についてのべた書物が、この時代以後も多数あるにもかかわらず、マキャベリの「君主論」がヨーロッパにおける最初の政治学書と呼ばれるゆえんは、こうした理由による）。こうした良い人間＝良い市民という図式が成立、発展した理由は、彼らの国家単位であるポリスが行政単位として極めて小さかった事に帰せられる。あらゆる組織は、その構成員に経・防・政面の組織の運営への参画の義務を要求するのだが、組織の規模が小さければ小さいほど、その構成員にはこの三つの義務全ての履行が要求される。これは人に¹⁰⁾、リアルな存在として組織を認知させる最大の要因となる。古代ギリシア・ポリスでは、市民一人一人がポリスの納税・軍事・議会運営の全てに参加していた。彼らのポリスとの一体感が極めて高かった事は容易に推測できる。そのため彼らにとって、彼らの属するポリスの繁栄は疑いなく善でありえたのであり、したがってそれを保証する良い市民もまた、疑いなく良い人間でありえたのである。

しかし、アレクサンドロスの東方遠征の過程の中でギリシア・ポリスはその性質を独立国家からマケドニアからの行政命令の執行機関に変容した。ここにおいてポリス市民はまず行政への参画する権利を失い、納税対象は自分達のポリスではなくマケドニアに変わった（これは納税された資金が自分達のもとへ再分配される保障がなくなり、納税者の納税への積極性を奪う事を意味する）。こうした中では、市民がポリスを自分達のものとしてリアルに感じる事は、ほとんどありえなく、またマケドニアがアレクサンドロスの手により領土的拡大を果たす事により、ポリスの代価をこれに求める事もできなかった。アレクサンドロスが遠征軍をアケメネス朝征服後にギリシア人傭兵からペルシア人に再編したのも、こうした事の要因となったのか

もしれない。結果として良い人間＝良い市民というギリシア文化における図式は、その根底から完全に覆され、良い人間という問題に対する解答の全面修正を求められる事になったのである。そしてアレクサンドロスの東方遠征後、つまりヘレニズムにおいて、良い人間の問題は個人主義的な傾向を帯びていく。これは、先にあげたように国家が個人の問題としてのリアリティを喪失した事がまずあげられるが、もう一つ重要な事柄がある。それは、ギリシア文化がオリエント文明と総称されるもの持つ多様性と直面した事である。

ヘレニズムは西方と東方の文化的融合である。この内西方はギリシア文化を意味し、言語、思想、慣習において高い統一性を持っていた。一方東方はオリエント文明を意味するが、こちらにはアケメネス朝が被支配民族の宗教や慣習に寛容であった事もあり、エジプト・中東・ペルシア・インドそれぞれの地域及び民族がそれぞれ異なる言語、慣習を保持していた。そうした諸文化の集積をオリエント文明と呼んでいるのであり、その多様性は西方側の統一性と大きく異なる。ヘレニズム時代における文化融合においてギリシア文化が圧倒的に優勢だった事は、アレクサンドロスの死後、分裂した諸国においてギリシア語が公用語となりギリシア風都市が各地に建設された事でも明らかである。しかしながら、オリエントの諸文化がギリシア文化に影響を与えた事もまた明らかである。ギリシア文化は、アレクサンドロスの東方遠征以前ではギリシア・ポリスのみが対象であり、それが古代ギリシア人にとって世界の全てであった。オリエント諸国は彼らにとって明らかに外世界であり、この事が彼らの民族的価値観の鈍化と文化的統一性を生み出したのである。しかし遠征以後、彼らは彼らの価値観によらない思想や文化を同世界の中に見出す事になった。アレクサンドロスの政策は、アケメネス朝が各民族に自治を認めていたのとは異なり、積極的にギリシア人を東方移住させ、モザイク状ではない文化的混在状態を作り上げ、一つの国としての統一性を高めるためのものであった。結果としてギリシア人達は、普段の実生活の中から自分達と異なる形成過程を経た文化と直面する事になったのである。こうした状態においては、特にそうした混在状態で異なる民族と共存する場合において相互理解が生じる事はほぼ必然的であるといえる。これらの事は、ギリシア人達にあらゆる価値観の相対化を、彼らの中に存在したソフィスト達がなした以上に深刻にせまったのである。その結果、ギリシアのポリスの中核とした思想は完全に解体された。当時発生した思想は、著名なものとしてエピクロス派やストア派があげられるが、いずれも個人を学問の対象としている思想である。また、エピクロスのように隠者的側面を持つ哲学者も当時見出されている。このようにアレクサンドロスの東方遠征の遺産であるヘレニズム文化の最大の特徴には個人主義的傾向があげられる。

こうしたヘレニズムにおける価値観の個人主義化はヘレニズムのもう一つの文化的特徴を自動的に導き出す。それは多様性である。個人主義は、基本的に個々の経験をもとに思想形成される。したがって一般的に個人主義が主流となる社会においては、多様性の確立は必然ですらある。しかも、ヘレニズムにおいて東西の片方を担うオリエント文明は元来、複数の民族の成立過程の異なる複数の文化の集合体であり、多様性を本質とする文明であった。ギリシア文化がこれらオリエントの個々の文化と結び付けられればヘレニズムが多様性を帯びるのは当然の帰結といえる。特にヘレニズム中期以後においては、マカベア戦争（B.C.166～B.C.142）に代表されるように、アレクサンドロス死後のアンティゴノス朝、セレウコス朝、プトレマイオス朝等の各王国にて見られるギリシア化政策に対する反動からオリエントの固有文化が台頭し、多様性は雑多の様相すら帯びて拡大したのである。

こうした個人主義とそれに付随する多様性の他にヘレニズムはもう一つ大きな特徴を持つ。それは普遍性である。

ヘレニズムにおいてギリシア人のポリス市民としてのアイデンティティが完全に解体された事は先にあげた通りである。これに加えてヘレニズムにおいてギリシアの言語・思想が東方に拡散したため非ギリシア人の中においてもギリシアの教養を持つ人々が多数現れた(そうした事が、ヘレニズムにおいて立身出世の条件だった事もこれに拍車をかけた)⁽⁴⁾。これらの事により、ギリシア人、非ギリシア人の区別がヘレニズムにおいて以前よりかなりの割合において希薄化された。したがってヘレニズムにおいて人種的な隔たりがなくなり、個人主義的傾向と共に世界市民的思想も発達したのである。この事からヘレニズムの思想の特徴は、あくまでも世界における個人の問題を対象とするが、それと同時にそれが万人において通用するものとしたものが多かった。しかし、こうした物を打ち出す理論を形成するためには、抽象的な要素を全面に押し出す必要がある。というのは、実生活に密着した具体的な事柄を要素に構成すれば、これは万人に普遍的に通用するものとしては成立しないからである。そのため、ヘレニズムの時代では民族的壁が解体され個人主義と世界市民的思想が最初に形成された事により、抽象的な言語が思想面において数多く使われる事になった。この事により、思想の普遍性と量的拡大は時代を追う事に加速度的に増えていった。またこうした普遍的は、ヘレニズムという時代がギリシア、オリエント双方にとって世界観の解体、再構築の時代であった事と結びつき、ヘレニズムの思想を宗教的色彩の濃いものとした。

このようにヘレニズムは個人主義、多様性、普遍性を三つの大きな柱として形成されている。こうした時代においては、思想のオリジナルを個人をさかのぼってまで導き出す事は不可能事に近い。というのは、その思想を形成した個人がすでにあらゆる雑多な思想の影響を受けたそれをさらに複数にわたって影響を受けているからである。したがって、この時代におけるオリジナルな思想の追求はナンセンスである。もしこの時代において各々の思想を世代を超えて系統づけるには、後世の人間が傾向分類しながら逆算的に導き出すしか方法はない。そのため、もし細かく分析して類型化したらおそらくは百花繚乱の状態と化するであろう。

こうした特徴を持つ社会はどんなものであるのか。それには今日の日本を見れば比較的想像しやすい。というのは、ギリシアからヘレニズムに移行する時の内的状況の変化と今の日本の内的状況がほぼ同じだからである。ギリシア思想の解体の要因としてポリスの組織としてのリアリティの喪失があった事、また組織のリアリティは、経・防・政への参画によって支えられるという事は先に述べた通りである。今日の日本はどうであろうか。防、すなわち軍事面においては兵役義務が日本にはないため当然これに日本人の多くが参画しているとは言い難い。政治面において投票率の低下が叫ばれている中にあり、国民がこれの運営から乖離した状況である事は否定しえない。最後に国家の経営面ではどうであろうか。日本では個人事業に関与している人々以外はほとんど全員が源泉徴収で納税をしている。したがって国民全体でその個々が納税義務の履行を直接的に自覚している状況とは言い難い。つまり日本では、日本国を自らの組織としてリアリティを持つための要素が全て欠いた状況にあるといえる。さらに財政構造改革や日本版ビッグ・バン、グローバル・スタンダードへの移行等、世界観の再構築を促す用語が頻繁にとびかっている。外国人や日本人の入出国の頻度がさらにあがればヘレニズムの内的状況との差違はほぼなくなるであろう。したがって今日の日本の状況を見れば、ヘレニズムの時代的状況は比較的想像しやすいであろう。

キリスト教はこうしたヘレニズムの統一された具体的価値観の存在しない、ある意味で混沌とした時代的狀況の中で成立したのである。無論こうした時代の中で生まれたものであるから、一口にキリスト教と言っても成立当時はいくつもの宗派に分かれていたが時代が進むと共に正統と呼ばれるものに収斂化した。それらは、つまりイエスの思想は、異端と呼ばれたもののそれは、そして正統として収斂化したもののそれは、ヘレニズムの文化的特徴である個人主義、多様性、普遍性をものさしにして見た時どんなものであるのか。次からそれら一つ一つを見ていこうと思う。

2章 「アログネス」に見られるグノーシス思想とその位置づけ

(1) ナグ・ハマディ文書の発見

キリスト教の成立期において最初にして最大の異端とされてきたものにキリスト教グノーシス主義がある。それだけキリスト教史上重要な存在であったにもかかわらず、彼らの文書は今世紀に入るまでほとんど伝わってこなかった。したがって、彼らの思想及び教義は、彼らの対立者側である正統派と呼ばれる人々の記事を通してでしか知られる事がなかった⁽⁶⁾。しかし、こうしたグノーシス主義に関する一次的資料の白紙的狀況は、1945年12月、ナグ・ハマディにおける文書群の発見により打ち破られた。これがナグ・ハマディ文書であるが、この文書群はこれまで全く知られていなかった文書群も数多く含まれるが、中には「トマスによる福音書」や「ヨハネのアポクリュフォン」のように教父作家によって文書表題だけは伝わっていたものも存在した。これらの文書と教父作家による反駁書とを比較する事で、教父達がどのような意図によってこれらの文書を書いたかがより鮮明化するため、これらの教父達による異端反駁書の資料的価値もこれまで以上に高まった。したがって、このナグ・ハマディ文書の発見は、クムラン文書のそれと並ぶ考古学上の、及び神学上の大発見と今日記憶されている。

ナグ・ハマディ文書⁽⁶⁾が成立した時代は、カートナーズから4世紀だと断定できる。この4世紀というのが非常に示唆的である。キリスト教グノーシス主義は、キリスト教の最初にして最大の異端とされており、初期の教父達によって、これに対する反駁書が数多く著作されたのだが、その内最後の偉大な反異端論者サラミスのエピファニオスが「全異端反駁書(葉箱)」を著したのが4世紀であり、これ以降キリスト教グノーシス主義に対する反駁文書は急速にその姿を消した。また4世紀というのは、315年のミラノ勅令以後、キリスト教会が急速に国家権力と結びつきローマ帝国内における地位の向上、影響力の拡大をはたした時代である(これは軍事力、つまり他者に対する強制力を所有したという事)。さらに、⁽⁷⁾367年にアレクサンドリアの司教アタナシオスが、今日まで続く、福音書、使徒行伝、書簡、詩経(黙示録)からなる27書の正経典以外の外典を読む事を禁じた時代でもあった。これらの事を統合すると、このナグ・ハマディ文書は、正当派キリスト教がローマ帝国において急速に拡大、強化されていく中でこれらの文書が禁書化され破棄が命じられた時、これらを守り保存する目的で埋められたものだと考えるのが、密封された状態で埋められていた事と合わせ考えても最も蓋然性が高い。というよりも、7~9世紀に書かれたグノーシス主義に対する反駁文書が発見されるなんてことがない限り、ほぼ間違いないだろう。

ナグ・ハマディ文書全文書に共通する特徴としては、全てがコプト語で書かれている点あげられる。「オクシリシコス・パピルス」にみられるように、ナグ・ハマディ文書より成立年代が古い文書が、ギリシア語で、且つ同じ文書をあつかっている事から考えても、これらナグ・

ハマディ文書が他言語からコプト語に翻訳されたのは確実である。ヘレニズム時代、公用語として通用していたのはラテン語とギリシア語であり、特にギリシア語はオリゲネスの著作等からもわかるように、かなりの広範囲にわたって学術語として普及していた。したがって、コプト語によって書かれたナグ・ハマディ文書群は極めて小さい地域において活用された事が想定しうる（ただし、他言語で書かれたこの文書の原本に関しては、この限りではない）。また発見された状態から考えても、おそらくこれらの文書は⁹⁾一つの施設において収蔵されていたものだろう。

以上がナグ・ハマディ文書の概要である。次にあげる“アロゲネス”は、このナグ・ハマディ文書のコーデックスX I に収録されている。

(2) “アロゲネス”

“アロゲネス”は、ナグ・ハマディ・コーデックス (NHC) X I の3にあたる文書である（註。“アロゲネス”よりの引用文は巻末文献表に挙げた Karen L. King 著に依拠し、拙訳を試みた）。文学形態は、アロゲネスから息子のメソスへの秘儀伝授という形をとっており、大きく分けると五つの部に分ける事ができる。この内、最初と最後の一部づつが導入部と結部を構成しており、これ以外の中3部がこの作品の主題となっている。

この主題の3部の内訳だが、まず第1部ではアロゲネスに、彼自らの内に存在する力、善の由来についての啓示がされ、彼がその力を知覚するまでが描かれている。この人間（ただし選ばれた人間。これについては後で詳細に述べる。）に内在する力の由来を啓示するという要素のために、神話論的な描写がここにおいてはなされている。

第2部は、自らの善なる力に目覚めたアロゲネスに対して“諸力”に関する啓示がなされる。また、身体を離脱し上昇にいたるまでの訓練や準備期間の啓示もここでなされる。ここにおいて特徴的に見られるのは“三重に力を持つ者”に関する記事で典型的な否定神学の形態をとっている事だろう。これは、ナグ・ハマディ文書においてはかなりの広範囲にわたって使われている手法である。

第3部はアロゲネスがついに肉体を離れ聖なる諸力の世界を見る事になるが、三重の力についてよく知ろうとすると、諸力によって止められる。これは第2部における啓示の延長線にあり、いわば第3部は第2部の展開部となっている。しかし、基本的にグノーシス文献においては、このように本来的自己への回帰の様子が描写される事は少なく“アロゲネス”独特の特徴といえる。

“アロゲネス”は基本的にはグノーシス文献における典型的な内容を示しているが、細部ではかなり異なる描写も見え隠れする。それについてこれから他のナグ・ハマディ文書からの引用を使いながら、各部ごとに見ていこうと思う。

まず導入部であるが、“アロゲネス”においてこの部分の本文は完全に欠落している。したがって導入部がないという事も完全には否定しえないが、他のナグ・ハマディ文書の例からいってそれはまずないだろう。各ナグ・ハマディ文書における導入部は“魂の解明” (NHC II, 6) や“三体のプロテソノイア” (NHC XIII, 1) のように表題のみという簡潔なものもあるが、複数の文によって構成される長めのものもある。それは次のようなものである。

⁹⁾救い主の教えと言葉。彼は沈黙の中に隠されたこれらの奥義を啓示した。すなわち、イ

エス＝キリストが。そして彼は、それらをヨハネに教え、ヨハネはそれに注意を払った。
（“ヨハネのアポクリュフォン” NHC II,1,1.1～4）

⁽¹⁰⁾支配者の本質について。真理の父の霊において、あの偉大な使徒が闇の支配について、われわれに告げた。すなわち「私たちの戦いは肉や血に対するものではなく、むしろ世の支配者たちと邪悪の霊力に対するものである」と。私がこれを君に書き送ったのは、君が私に支配者たちの本質について尋ねているからである。（“アルコーンの本質” NHC II,8 6,1.20～）

⁽¹¹⁾これらは、生けるイエスが語り、デドモ・ユダ・トマスが書き留めた秘密の言葉である。
（“トマスによる福音書” NHC II,2,1.1～3）

ナグ・ハマディ文書以外にも新約聖書における“ルカによる福音書”やパウロ書簡、“ヨハネ黙示録”等にもこうした導入部がみられる。“アロゲネス”の場合はメソスという明確な秘儀伝授の相手が存在する。したがっておそらくは“アルコーンの本質”やパウロ書簡のような導入部になると思われる。しかし、“アロゲネス”の最初の欠損部は6行目の途中までであり、しかもその内かなりの部分は第1部の部分に割かれていると考えられる。このため“アロゲネス”における導入部は“魂の解明”のような表題のみか、あるいは新約聖書に収録されている“ヤコブの手紙”のような簡潔なものが想定しうる。

“アロゲネス”の第1部は、同文書の45,1-5から52,13までにあたる。その内容は、先にあげたように、アロゲネスが彼自身の内に存在する力の由来に関しての啓示を受ける事である。その啓示内において存在を描写されているのは、“三重に力を持つ者（不可視の霊）”、“バルベロ”、“三倍に男性的な者（完全なる青年）”、そして“彼ら”と呼ばれている、おそらくは聖なる諸力の四者である。この内、至高の存在とされているのは“三重に力を持つ者”である。これは“アロゲネス”の次の文章から限定可能である。

真に実在するのは、“三重に力を持つ者”である。（“アロゲネス” 47,21）

なぜなら彼（三重に力を持つ者）は、彼ら全てが送り出されたところの根源だからである。彼は完全性に先んじ、全ての力を提供する以上は、全ての神格に、また全ての祝福に先んじる存在である。（“アロゲネス” 47,26～33）

この三重に力を持つ者について“アロゲネス”の第1部における啓示者は次のように報告している。

彼は不可視のものとして、彼ら全てにとって理解できない存在として、全てのそれらを自身の内に含みつつ存在する。…中略…彼はいつの時代も一者であり、また彼ら全ての中に存在する。（“アロゲネス” 47,9～18）

この引用文の前半部から、この至高神の存在が外的であるのと同時に巨大なものとして描かれ

ているのが分かる。この、神は巨大である、というのは当時、環地中海、特に北アフリカで広まっていたモチーフらしく、同様の記事がヘルメス文書内においても見出す事ができる。“ヘルメス撰集Ⅱ”では動かすものと運動するものでは前者が強く、両者は逆の性質のものであると明らかにした後、次のような対話が続く。

「¹⁴²そこでその中で（宇宙が）動かされている場所はどれ程のものであり、その性質はどのような類のものでなければならないであろうか。（宇宙の）経験した運行を受容し、運動するものが狭さのために圧迫されて運動が妨げられないためには、場所をはるかに大きいものでなければならないのではないか」。

「トリスメギストスよ。それは或る巨大なものでなければなりません」。

「また場所はいかなる性質のものであろうか。以上からしてそれは（宇宙と）逆の性質のものではないのか、アスクレーピオスよ。さて、体と逆の性質（に当たるの）は非体的なものである」。

「仰言る通りです」。

「そこで場所は非体的である。そして非体的なものは神神的であるか神であるかである——」。
（“ヘルメス撰集” 3～5）

このような、神を世界を包む存在として描く事は西洋においては古来より一般的であった。この理由としては、古代ギリシア時代から中世まで一般的に考えられていた、閉じた宇宙論が考えられる。こうした宇宙論のもとにおいては至高神は世界を支配する絶対者として宇宙で最も外側におかれるのが自然であり、実際中世の芸術においてはそういうモチーフで描かれたものも多く、ダンテの「神曲」においても同様の宇宙観、世界観が見出される。また¹⁴³マタイ福音書でも神の国を一貫して天の国と描写している事、祈りの言葉の最初の呼びかけ「父よ」に“天におられる”という語句をルカのものに加えている事から、同様の宇宙観を前提にしている事がわかる。しかし先ほどあげた“アロゲネス”の引用文の後半には神の内在性についても言及している箇所がある。これは前半の外なる神論と真っ向から対立するが、この思想も正経典や他のナグ・ハマディ文書に言及されている。正経典では“ルカによる福音書”がこの立場をとっているようである。それはイエスに帰せられている次の言葉より推測しうる。

「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に神の国はあなたがたの間にあるのだ。」（ルカ17,20～21）

また、ナグ・ハマディ文書では“トマスによる福音書”に、同じくイエスに帰せられている言葉で神の内在性を説いている箇所がある。

¹⁴⁴イエスが言った、「もしあなたがたの指導者たちがあなたがたに『見よ、御国は天にある』と言うならば、そのときには天の鳥たちがあなたがたに先んずるであろう。もし彼らがあなたがたに『御国は海にある』と言うならば、魚たちがあなたがたに先んずるであろう。それよりも、御国はあなたがたの内にあり、また、それはあなたがたの外にある。あなたがたがあなたがた自身を知るならば、そのときにはあなたがたは知られるであろうし、

また、あなたがたが生ける父の子であることをあなたがたは知るであろう。しかし、もしあなたがたがあなたがた自身を知らないならば、あなたがたは貧困にとどまるであろうし、また、あなたがたは貧困なのである」。(“トマスによる福音書” 語録3)

こうした神の内在性という考えは少なくともギリシア神話の中においては成立しえない。というのは、ギリシアの神々は彼らの間の争いにより運命を決定し、またその意志を伝達する時は人や生物に姿を変え人間世界に現れる。これについては「オデュッセイア」の中の⁽¹⁵⁾テレマコスと女神アテネの関係が典型であろう。つまりギリシア神話では神が人間を内側から突き動かす事はないのである。したがって、この神の内在性というモチーフはオリエントにおいて成立したものであろう。キリスト教の母体であるユダヤ教の聖典である旧約聖書では神が人間の意志にまで関与する事についての言及はそこかしこにおいて見うけられる。典型例としてはモーゼとファラオの対話の場面において見出せるだろう。またこうした神的存在が人間の内的動因として働きかけるというモチーフは、オリエントにおいてはごく一般的らしく、日本でも浄土真宗等に見られる。“アロゲネス”においては“トマスによる福音書”と同様に神について外在性と内在性とを両方主張している。ただし、“アロゲネス”においては内なる力、善は神そのものではなく、神に由来するものだとしている。それは次の文から見出される。

あなたを教えたのは、私が与えた守護者であり、そしてしばしば話の中で自ら宣教したの
はあなたの中で永遠に存在する力である。彼は三重に力を持つ者に由来するものである。
 (“アロゲネス” 45,9~13)

人間の内なる力は、神に由来するものだが、神そのものではないとする考えは、同じナグ・ハマディ文書でも「ヨハネのアポクリュフォン」においてもみられる。

⁽¹⁶⁾“ヨハネのアポクリュフォン”の神話論ではまず不可視の霊が聖なる諸力を生み出す。その諸力の内最下位のアイオーンの一つであるソフィアが自らの過ちにより物質界の支配者となるヤルダバオートを生み出す。ヤルダバオートは自らの生んだ諸力、アルコーン達と共に聖なる諸力の形に似せた物質的人間を形成したが、それは動かなかった。ヤルダバオートがソフィアから奪った力をそれに与えればそれは動くという啓示を受け、実行した。つまり人間は不可視の霊より生まれた聖なる諸力を受け継いでいるというわけである。この神話論のものとは人間は単独において動いているのではない。至高神に由来する力の故に動くようになったのである。“アロゲネス”の第1部は、自らの内なる力の自覚が主題となっている事は先にあげているが、その自覚というのは今あげたこれらの事を自覚する事について述べていると思われるし、また神の内在性と外在性についての言及と合わせ考えて説明しやすい。“トマスによる福音書”の語録3もまた、“自身を知るなら、父の子である事を知るであろう”という箇所から推測するにおそらく同様の神話的認識を含んでいると思われる。こうした神の内在性と外在性という一見矛盾する主題は、キリスト教の正経典のパウロ書簡“ガラテヤの信徒への手紙”の中に見出せる。

わたしは神に対して生きるために、律法に対しては律法によって死んだのです。わたしはキリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません

ん。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。（“ガラテヤの信徒への手紙” 2,19～20）

パウロは、その書簡で信仰が最重要であり、律法の遵守に関してはそれほど厳格な態度をとっていない。これは彼が倫理的に墮落していた事を意味しない。現に彼は“ローマの信徒への手紙”第4章18節～32節にかけて不義なる人間の倫理的退廃に言及しているし、また彼自身はかなり禁欲的な生活を送っていたようである。また“律法に対しては律法によって死んだ”と言及しているが、パウロは“ローマの信徒への手紙”において“文字による律法は肉である”という事についてしつこいくらいに強調しており、これを読み替えば、肉体的欲求などの罪への誘因となるものが、神に対して生きるために死んだ、という禁欲的解釈にもとれるのである。こうした禁欲的側面は、“ヨハネのアポクリュフォン”の著者においても見られ、彼は人間の身体が、⁽¹⁷⁾盲目の者（サマエール）等のアルコーンによって生み出されたもので、肉体的欲求に流される事は本来的自己を覆い隠すものとして“アロゲネス”で⁽¹⁸⁾「肉で身体を覆われているという事実にもかかわらず」とのべられているように軽蔑し、全面的な禁欲主義を要求しており、パウロと同様の事を主張している。その結果として導き出される自らの内に神的存在が生きているという認識もおそらくは同様のものであろう。では、それにつづくガラテヤ書の20節後半における神の外在性について言及した部分ではどうか。パウロはイエス＝キリストへの信仰によって自身が生きているとしているが、“ヨハネのアポクリュフォン”では本来的自己の由来するところを贅美するが、そこへの帰還は各々禁欲的行為によって生ける者となるかどうかが決まされる。これらは一見して正反対の事をつけているようにみえる。しかし、パウロは“ローマの信徒への手紙”にこうも記している。

従って、あなたがたの死ぬべき体を罪に支配させて、体の欲望に従うようなことがあつてはなりません。またあなたがたの五体を不義のための道具として罪にまかせてはなりません。かえって自分自身を死者の中から生き返った者として神に献じ、また五体を義のための道具として神に献げなさい。なぜなら、罪は、もはや、あなたがたを支配する事はないからです。（ローマ信徒への手紙6,12～14）

つまりこれは、信仰によって義とされたからには、再び罪に支配される事のないように、という事について言っているのである。という事は本来的自己を認識したら再びそれを見失わないようにとのべる“ヨハネのアポクリュフォン”の著者とおおむね変わらないと言っているだろう。

パウロという存在は初期キリスト教において決定的に重要である。それは、ナグ・ハマディ文書の各文書を著した人々にもいえるかもしれない。例えば“アルコーンの本質”という文書では“偉大な使徒がわれわれに告げた”という語句に続いて¹⁹“コロサイの信徒への手紙”の引用文（1章13節）を引っぱってきている。“アロゲネス”や“ヨハネのアポクリュフォン”等が文書として成立したのはおそらくパウロ以後と思われるため、これらの文書がパウロ書簡の影響下のもとで成立したという推測もできなくもないが、おそらくこれはないだろう。神の内在性と外在性とを同時に言及する両文書の神話論の土台となったものは、キリスト教とは全

然別のところですでに成立していたと推測される。この理由についてはあとで述べる事になると思うが、おそらく神の内存在性、外在性を同時に言及するという宗教的モチーフは西方と東方の文化的混在状況であったヘレニズム時代の文化的混交の典型的なものであり、当時一般に流布していたものと自分は推測する。

“アロゲネス”における至神高の特徴として最後にもう一つ、いろいろな形容詞が主に否定形を中心に描写されているという点である。それは次のようなものである。

なぜならこの者は、存在要因として、また根源として、また非物質的物質として、無数的有数として、形相なき形相として、また力ある非力者として、非実体的実体として、非活動的活動として位置づけられる一者であり、おそらくは供給の供給者、神格の神性という存在だからである。(“アロゲネス” 47,19~32)

このような否定神学的展開は“ヨハネのアポクリュフォン”においてもみられる。“ヨハネのアポクリュフォン”では、ここにあげたのと同様な描写で22,16から26,6まで、つまり4ページ以上費やしている。これらは、至高神が最終的に誰でもない事と、不可知である事を意味している。神話形態からおそらく“アロゲネス”や“ヨハネのアポクリュフォン”と同系列におかれるであろう“三体のプロテノイア”でも、それは“見られざる”“測られざる者”“達しえざる者”と呼ばれその知る事の困難性が強調されている。正統派と呼ばれる人々の著作の中でもこうした表現は見出される。それは次のようなものである。

⁽²⁰⁾実際、いかなる言葉も、キリストスの起源や、その威厳、その本質・本性などを記述するには十分ではない。なぜならば、神の霊が預言の中で「だれが彼の世代を語るだろう」と言っているように、父を知る者は子しかなく、子を正しく知る者はそれを儲けた父しかいないからである。(エウセビオス“教会史”I,(2))

ここにおいては、父なる神は子にのみに知られ、子なる神は父にのみに完全に知られるとしている。“ヨハネのアポクリュフォン”においてはそれをさらに拡大し、子にすら父を完全に知る事ができないとしている。基本的にグノーシス主義の特徴として、神的存在と自己との同一性を説く事があげられるが至高神だけはどれも共通して他の神的存在と一線を画しているものが多い。こうした超越者たる至高神というのはヘレニズムにおいては多数存在していたようである。

“バルベロ”は“アロゲネス”と用語的平行関係が著しい“ヨハネのアポクリュフォン”の記事においては、次のようなものとされている。

⁽²¹⁾彼は、自分を取り囲んだ彼自身の光の中で自己自身を把握する者、とはすなわち、生命の水の泉、清浄さに満ち満ちた光である。霊の泉が、光の生ける水から流れ出て、すべてのアイオンとあらゆる世界の支度をした。彼は自らを取り巻く純粋なる光の水の中に彼自身の象を見たとき、それを認識した。すると彼の「思考」が活発になって現れ出た。それ（「思考」）は光の輝きの中から彼の前へ歩み出た。——すなわちこれが万物に先立つ力であり、（今や）現れ出たものである。これが、すなわち万物の完全なる「プロノイア」、

光、光の似像、見えざる者の影像である。それは完全なる力、バルベロー、栄光の完全なるアイオンである。（“ヨハネのアポクリュフォン” B26,15～B27,14）

“ヨハネのアポクリュフォン”では至高神の思考が実体化したものをバルベロと呼んでいる。“アロゲネス”におけるバルベロもおそらくこの“ヨハネのアポクリュフォン”のバルベロ像に準じていると思われる。それは次の事からである。

それ（“バルベロ”）は、たち現れたあの知識の永遠の光であり、男女なる栄光であり、アイオンの第一の者であり、唯一三重の力を持つアイオンに由来する者である。（“アロゲネス” 45,15～20）

“アロゲネス”も思考の実体化した者をバルベロだとしている。しかし、これとは、基本線は一緒だが異なるバルベロの扱いをしている文書がある。それは、ここまで平行関係を指揮してきた“三体のプロテンノイア”の一節である。

⁽²²⁾私はプロテンノイア、父の中に存在する⁽²³⁾思いである。（“三体のプロテンノイア” 35,1～2）

⁽²⁴⁾私は低く響く呼び声である。そこで私は、はじめから存在し、そしてあらゆる物をつつむ⁽²⁵⁾沈黙の中に存在している。（同上35,35～36,1）

⁽²⁶⁾私は水を湧き出させた者である。（同上36,5～6）

つまり、ここからわかるように、“三体のプロテンノイア”で実体化していない段階から父の思いをバルベロとしており、彼女を元初からの父との対存在として存在させているのである。この相違は作品の性格をかなり違うものとしている。例えば、“ヨハネのアポクリュフォン”では、父である至高神が常に自らの意思決定をしているが、“三体のプロテンノイア”ではバルベロが父の意志として全てを決定し、父自身が何かを決めるという事は絶対ない。つまり“三体のプロテンノイア”の方が、存在それ自体と存在の意志は全くの別物であるという哲学的なモチーフをより徹底して表現しているのである。この哲学的モチーフは他文書においても見られる。

⁽²⁷⁾「…そこで非体的であるものが神的であるなら、それは（何らかの）本質を有する。しかし神であるなら（規定される）本質さえも有さないものになる。しかも次の意味で（のみ）思惟されることになる。すなわち、至高神は私どもにとっては思惟されるのであるが、ご自身にとっては思惟されないのである。なぜなら、思惟されるのは思惟する者の意識の対象と化すからである。したがって、神はご自身にとっては思惟されないのである。（ご自身にとって思惟されるとすれば、思惟する）神が思惟される神と異質のものとなるので、ご自身によって思惟されることはないのである。…」（“ヘルメス撰集Ⅱ” 5）

“三体のプロテンノイア”は、おそらくこの“ヘルメス撰集Ⅱ”と同様の認識のもとに書かれている。“ヨハネのアポクリュフォン”の方は基本的に至高神を並ぶもののない単独者として描き出そうとしているのに対し、“三体のプロテンノイア”は論理的整合性や秩序を優先する。このバルベロの扱いの違いは、こうした力点の置き方の違いにおいて生じたものと思われる。“三体のプロテンノイア”はこうした父なる神の単独至高性を犠牲にした代わりに、至高者に関して“ヨハネのアポクリュフォン”とは違う別の定義を導き出している。

⁽²⁸⁾私はプロテンノイア、父の中に存在する思いである。私は万物に存在する運動であり、万物は私の中であって成り立っており、成ったものの中の最初に生まれたもの、万物より先に存在し、三つの名前と呼ばれているが、ひとり全き者として存在する（“三体のプロテンノイア” 35,1~6）

⁽²⁹⁾そのとき、あらゆる点で全き子——彼は言葉であり、呼び声によって生まれたものであり、最初に高みから由来した者であり、名を自らのうちに持っていた者であり、光である——が無限のものを啓示した。そしてすべての知られざるものが知られた。そして解釈しがたいものと隠されているものとを彼は啓示した。（同上37,3~11）

⁽³⁰⁾しかし私の思いから生じた呼び声は三つの住まいの中に存在する。すなわち父と母と子の中に。（同上37,20~22）

“三体のプロテンノイア”では、まず思い（エンノイア）は先在的に父の中に存在する事、つまりそれは実体化していないという事は、先に述べた通りである。この事によりエンノイアは本質的に父と同一である。またこのエンノイアによって子なるキリストも生じる。これもまた父と本質的に同一である。だからこそキリストは父なる神の全てを啓示する事が可能なのである。また彼らは三体で全き一人として、つまり神として存在している。これは完全な三位一体論である。これらの事からわかるとおり“三体のプロテンノイア”では父なる神の単独至高性をなくした代わりに父、母、子の三者を至高神を構成する要素として定義し直し、至高神の絶対性を維持したのである。

“アロゲネス”はこの両者のどちらに属するのか。“アロゲネス”ではバルベロを実体化されたものとしているため、本質が非実体である父とは、由来するものであっても同質ではない。この事からすれば“アロゲネス”は“ヨハネのアポクリュフォン”に近い。しかしながら、次の文

そしてこれら三者は、個々に考えられた時は三であるのだけれども、一である。（“アロゲネス” 49,36~38）

これからもわかるとおり三一論の要素も出てきている。これらの事から自分は、この同類型の神話を保持する“アロゲネス”“ヨハネのアポクリュフォン”“三体のプロテンノイア”の成立は“ヨハネのアポクリュフォン”“アロゲネス”“三体のプロテンノイア”の順番であると推測する。また“三体のプロテンノイア”はおそらく、正統派と呼ばれた人々が三一論

について議論していたのと同時期、3世紀後半ぐらいに成立したのではないと思われる。

次は“完全なる青年”の扱いである。“アロゲネス”において、これがキリストである事は以下の文から容易に推測しうる。

バルベロは、これらの者一人ごとをよく知る、そして一部一部、一つ一つ現実化される、自然に由来する罪を継続的に関与させられたところの象徴である神的なるアウトゲネスを所有している。不可視の霊とともにある彼（アウトゲネス）は、彼ら全てを救済する三倍に男性的なものを所有している。この完全なる青年は、計画に由来する言葉である。（“アロゲネス” 51,25～36）

また、“アロゲネス”と平行関係の著しい“ヨハネのアポクリュフォン”の次の文章も、この“完全なる青年”がキリストであるという事を示している。

⁽³¹⁾すると見よ、私の前に一人の青年が現れた。…中略…すると彼が私に言った。「君はこの現象に慣れていないとでも言うのか。怖じけるな、私はいつでも君たちと共にいる。⁽³²⁾私は父であり、私は母であり、私は子である。…」。（“ヨハネのアポクリュフォン” B21,1～）

このように“完全なる青年”は救済を司る者として両文書には描かれている。しかし、それにもかかわらずこの両文書における。“完全なる青年”の扱われ方は、“不可視の霊”や“バルベロ”のそれにくらべ、あまり重視されていない。“アロゲネス”における“完全なる青年”に関する啓示は先ほどの引用文と第2部の一部（55,35～56,36）において触れられるのみである。“ヨハネのアポクリュフォン”にいたってはさらにひどく⁽³³⁾、キリストはヨハネに対する啓示者、導師として描かれているにすぎない。また本来彼が司るはずの救済も、この文書に置いては母なるバルベロに由来するエピノイアによってなされる⁽³⁴⁾。これらの事は両文書の母体となった神話論が本来は子なる神を必要としていなかった事、つまりキリスト教とは全然別のところで成立したものだという事を指し示しているように思われる。また先ほどあげたように、神の内在性と外在性の問題はこの神話論において欠く事のできない要素であるのに、子なる神は構成上何らそれに対して関与していない。つまり“アロゲネス”や“ヨハネのアポクリュフォン”の神話論が、神の外在性を説くギリシア的のものと神の内在性を説くオリエンタ的なものの、ヘレニズムにおいて特徴的な文化的混交から成立した事をこれらの事は示している。この事から、この問題に関するパウロ書簡の影響はほとんどなかったと思われる。しかし、この両文書において子なる神への言及がされている事も間違いない事実である。したがってこの両文書は、ヘレニズムにおいて成立した神話論からキリスト教化していく過程の中で成立したのであり、グノーシス主義が、ハルナックの提示した定式のような「キリスト教の急性なギリシア化」では必ずしもない事がわかる。少なくともこの両文書にかぎって言えば、このハルナックの定式は完全に当てはまらない。

そして最後に“彼ら”と総称される者達であるが、基本的に“アロゲネス”の記事ではあまり彼らの存在の性格は判然としない。“彼ら”というのは基本的に前にあげた。“三重に力を持つ者”、“バルベロ”、“完全なる青年”の三者とのからみで出てきており、またこの三者の

下位におかれる形で描写されている。さらに“アロゲネス”のある記事は彼らの特徴として次のように述べている。

一方において彼らは個々に存在するが、しかし他方において彼らは共に存在する。（“アロゲネス” 46,6）

つまり彼らが自分以外の要素と相補的に存在している事をこの記事は伝えている。“ヨハネのアポクリュフォン”におけるこうした相補的關係は全体的に見られる。それは、「第一の認識」と「不滅性」「永遠の生命」と「真理」というような男女の対存在として一貫として描かれている。“アロゲネス”における“彼ら”というのは、おそらく“ヨハネのアポクリュフォン”におけるこれらの事を指し示していると思われる。

これまで“アロゲネス”の啓示の中で登場する主だった者を見てきたが、これにより“アロゲネス”の持つ神話の輪郭は大体のところ明らかである。まず“アロゲネス”は霊的世界と身体的世界を明確に分けている。さらに霊的世界においても“三重に力を持つ者”を別格の存在として高めている。さらに言及されていないものの“ヨハネのアポクリュフォン”で見られるようなアルコーンの世界も前提としているなら“アロゲネス”の神話論の世界観は四次元的なものである。さらに生成は、“三重に力を持つ者”、“バルベロ”、“完全なる青年”の順で行われており、これは“ヨハネのアポクリュフォン”でも見られるような流出論の形をとっている。また“三重に力を持つ者”は永遠に知られざる存在として否定神学が展開される事など、これらの特徴はグノーシス主義の中でもセツ派のものを多く反映している。ナグ・ハマディ文書内でこのセツ派のものと思われる文書は“アロゲネス”以外に“ヨハネのアポクリュフォン”、“アルコーンの本質”、“エジプト人の福音書 (NHC III,2)”、“アダムの黙示録 (NHC V,5)”、“ゾーストゥリアノス (NHC VIII,1)”、“メルキゼデク (NHC IX,1)”、“ノレアの思想 (NHC IX,2)”、“マルサネス (NHC X,1)”、“三体のプロータンノイア”等があげられている。しかし先に述べた“ヨハネのアポクリュフォン”と“三体のプロータンノイア”の神話の変遷に見られるように、同じセツ派内の文書と言ってもその内容は一定していない。これにナグ・ハマディ文書の“魂の解明”等の他のグノーシス文献を加えると、その特徴の多様性はさらに拡大する。ナグ・ハマディ文書の所持者であった人々は、その多様性をそのままに受け止めていたのであり、この事はグノーシス主義の特徴としてエイレナイオスの次の報告と合致する。

毎日、彼らの誰もが、何か新しい事を考え出す。この種の創作力が豊かでないならば彼らの内誰一人として全き者とは見なされない。（Adv.Haer. I,18,1~5）

こうしたグノーシス文献の多様性とそれを導き出す個人主義的傾向は、正典を2000年近くも保持した今日のキリスト教とは大いに異なる。こうした正統派と呼ばれたものとの違いは“アロゲネス”の第2部以降にも見られる。

“アロゲネス”の第2部は第1部に引き続き啓示が続けられている。この第2部で最も特徴的なのは次の二つの文に見られる事だろう。

これらは、あなたが大いなる沈黙と大いなる秘儀でもって守るであろうところの言葉である。なぜなら、これらは全ての者に話される事はないが、聞く能力を持つ価値あるそれらの者にのみには話されるからである。（“アロゲネス” 52,19～25）

なぜなら私は、偉大なる光の中にあり、祝福された道の上に立って存在しつつ大いに喜んだからである、というのは、一方において私は見る価値のある者になって、そしておそらくは、偉大な力にのみふさわしいあれらの事を聞く価値のある者になったからである。（“同上” 57,32～39）

これら二つの文は、“アロゲネス”において秘儀がごく少数の者にしか理解できないというエリート主義的傾向を示している。こうした事は“トマスによる福音書”においてよく見られる“聞く耳ある者は聞くがよい”という定例句にも見られる（語録8,21,24,63,65,96）。また、この定例句は正典の中でも見られる（マタイ11・15、13・9、マルコ4・9、7・16、ルカ8・8、14・35）。これらはキリスト教が成立時において、必ずしも教会を中心とした大衆宗教ではなかった事、あくまでも個人が単独において真理を追求する個人主義的傾向が強かった事を意味している。また“アロゲネス”の第2部ではこの真理追求のための訓練方法も明示されている。

私は彼らを通じて私自身を準備した。そして私は、何百年にわたり私自身と協議した。（“アロゲネス” 57,29～31）

これは、おそらく“アロゲネス”を著作した人物の所属するグループが瞑想を具体的な訓練方法として用いていた事を示している。また、この訓練は、第3部における霊的世界へ引き上げられるための準備として設けられているが、この収斂と拡大の運動は第1部においても見られる。

なぜなら、それは静められた時広げられ、そして広げられた時完全となったからである。（“アロゲネス” 45,22～24）

ここにおける“それ”は、人の内に存在する力（善）をさしている。つまり、これまでの“アロゲネス”に見られる禁欲的側面から考えれば、準備というのは、身体的欲望を促す世界から自らを切り離し、ただただ自分の内面にあるものと向き合う事を意味している。これは教会で行われる sacrament と異なり、むしろ仏教に見られるようなものに類する個人主義的傾向の強いものである。少なくともギリシアやローマの宗教で成立した宗教的行為ではなくオリエントの出自のものである。インドのパラモン系の宗教の影響も考えられるかもしれない。また、“アロゲネス”や“ヨハネのアポクリュフォン”の神話論で見られる世界の元初は“不可視の霊”が自らの内面に向かい（思考し）、流出をはじめた事で形成されている。つまりこのものの収斂と拡大という運動は“アロゲネス”においては全世界の運動の規模となるものなのである。こうした運動によって世界を説明しようとする試みに“アロゲネス”の著者の普遍的な真理への欲求が見出される。グノーシス文献においてこのような具体的な訓練や真理の説明がなされる事はほとんどない。ナグ・ハマディ文書の多くもそうだが、基本的にグノーシス文献は神

話の描写がなされているものがほとんどである。この事は“アロゲネス”にみられる訓練や真理というものが、本来口伝において個人に伝授される奥義である事を指し示しているように思われる。実際“アロゲネス”も実状はどうだったかは知らないが、文学形式においてはあくまでメソス個人にあてたものである。いずれにせよ、これは“アロゲネス”のナグ・ハマディ文書のなかでも際立った特徴の一つといえる。

第3部は、第1部、第2部で啓示された神的世界をアロゲネスが実際に見る事について書かれている。ここで特徴的なのは、神的世界を見たアロゲネスが“三重に力を持つ者”を、より正確に言うとその本質を知ろうとすると、それを神的なものが不可能であるからといって止めるという事だろう。“三重に力を持つ者”が神性、つまり神である事は“アロゲネス”の否定神学的特徴について述べたところで引用した文によって明らかである。また神性の本質を知る事が不可能であるという事、そもそも神性は本質すら有さない、全てのものの原因であるという事は“ヘルメス撰集Ⅱ”において見られる。では、何故これを見る事を止めるのだろうか。それは不可能である事と同時に“アロゲネス”において一貫されている宗教的モチーフに帰せられると自分は考える。

“アロゲネス”において一貫してみられる宗教的モチーフは、飢えと充足である。“アロゲネス”の著者はその最初から最後まで、この世の全てを理解しえない、知らない自分という存在に限りない欠乏感を常に抱いている。それが啓示によって知識を与えられる事により最大限の充足感を得るのである。こうした宗教的モチーフは正典の中にも見出せる。特にそれが顕著なのが、俗に山上の乗訓と呼ばれている語録である。特に“ルカによる福音書”のものがよりその傾向が強い。ここでは貧しい人々、飢えている人々、泣いている人々等、社会的弱者を幸いだとしているのに対し、富んでいる者、満腹している人々、笑っている人々等社会的幸福、より正確に言えば物質的に恵まれている人々を不幸だとしている。これは物質的なものによる充足感が有限であるのに対し、物質によらない充足感は継続的に続くからである。この事は同じ“ルカによる福音書”の次の文章も有力な傍証となるだろう。

自分の持ち物売り払って施しなさい。擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい。そこは、盗人も近よらず、虫も食い荒らさない。あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ。（“ルカによる福音書”12,33~34）

また充足感というのは、あくまで飢えの存在があってこそ初めて成立するものである。物質的充足はそれが継続し、日常化すれば充足ではなくなる。常に充足感をうるためには、平行して常に飢えを感じていなければならないのである。つまり充足と飢えとは本質的に同義語なのである。“アロゲネス”ではこのモチーフを正典よりさらに拡大している。まず物質的な充足を真の充足とみなさないところは正典と同様である。また“三重に力を持つ者”の本質を全て知る事は、人の知的欲求を完全に充足させるが、それは一瞬であり、次の瞬間には今度は知的欲求を充足させた事自体が欠乏となり新たな飢えが生じる。そもそも完全な充足であるはずの“三重に力を持つ者”自体が完全で不動であるが故に同時に活動に対する永続的な欠乏、飢えを内包している。だからこそ“三重に力を持つ者”からバルベロが生じ世界が成立したのである。このため“三重に力を持つ者”は常に飢えと充足との間を連続的に運動しており、その存在は不定である。完全で不動である“三重に力を持つ者”は確かに理論上存在するが、同時に

それは存在しないものでもある。永続的な充足性というのは、不動の真理の中に存在するのではなく、飢えと充足の間で連続する運動の中に存在する。だからこそ人々にとって“三重に力を持つ者”は運動して不定であるが故に常に不可知なものであり、それは人々に充足感を永続的に与え続ける、あるいは満たす存在として超越的でありえるのである。

以上“アロゲネス”や他のグノーシス文献などを比較してきたが、それによりグノーシス主義が多分に個人主義であり、多様であり、普遍的な性格を帯びていた事がわかる。これらは全て、ヘレニズムの文化的特徴と平行している。つまり、キリスト教の正統派と呼ばれていた人々から異端として排斥されたグノーシス主義だが、ヘレニズム時代の文化的潮流から見れば本流に位置する宗教運動だったのである。むしろ、こうしたヘレニズムの時代に、正典を規定し、教会と位階制度を中核として強大な組織化運動を起こし、且つそれに成功した正統的キリスト教にこそ異様性を見出す事ができる。そうした組織化運動は、イエスの宗教運動からどういう経過をへて成立したのだろうか。次の章からはこの問題に関してふれていこうと思う。

第3章 キリスト教のヘレニズム的側面～イエスとパウロに見られる思想

(1) Qに関して

今日の新約聖書学で最も活発な研究分野の一つとして“Q”の存在があげられる。Qというのは、二資料仮説を前提としている問題であり、一般的にはルカとマタイの間で平行関係の成立する非マルコ記事をさしている。二資料仮説というのは、マタイとルカの両福音書の成立過程に関する仮説である。マタイとルカの内容は基本的にマルコの物語の記事に準じている。しかし、マタイとルカの間には、マルコにはない記事にも多くの平行関係が含まれている。これらの記事のほとんどは、イエスの語録と説教に関する部分である。また、このマタイとルカの平行関係は文法や単語において一致する部分が多くある。これらの事から、マタイ、ルカの著者がマルコの他にもう一つ共通した文書資料を用いていた可能性は強いと判断されている。このもう一つの仮定されている資料の事をQ（ドイツ語で資料を意味する Quelle の略称）と呼んでいるのである。Qと目されているマタイ、ルカの平行関係部分の多くが、イエスの語録や説教によって構成されているという事は先ほど述べた通りである。この事からQはおそらくイエスの語録集のようなものであったと推測されている。この二資料仮説は19世紀にはすでに提唱されていたが、これを仮説にとどめていたものに、こうした語録集があつた当時の文学形態として成立しうるかという疑問があつた。しかし、ナグ・ハマディ文書に収録されていた“トマスによる福音書”の発見により、この疑問は解消された。まさしくこの“トマスによる福音書”こそ、Qにおいて推測されていた語録集という文学形態をとっていたからである。その後の研究により、この“トマスによる福音書”の成文化は四福音書をさかのぼらないとされている（伝承レベルではおそらくもっと古いと思われるが）。しかしこの発見によりQの存在は仮説から、事実存在したものとして認識されるようになったのである。

この二資料仮説の最大の意義は、マルコ、マタイ、ルカといった福音書の著者が、いくつかの資料から自らの教説に合うように編集した事を明らかにした事である。この事により福音書の事柄の全てがイエスに帰せられるのではない事、イエスに帰せられる思想は必ずしも受難と復活にみられるような英雄的生涯の中にはない事、むしろ彼に帰せられる語録や説教の中にこれが存在する事が明らかになった。それまで、キリスト教において受難と復活という英雄的生涯とイエスの思想は不可分のものであった。それは、それまで福音書の中で彼の語録や思想が

彼の生涯の物語の中で一体のものとして組み込まれていたからである。しかし、この二資料仮説により、イエスの思想や語録は物語の中から切り離され浮きぼりにされた。そこで私達はこれまでのものと違う新しいイエス像を見出す事になるのである。

(2) イエス語録の思想

イエスは、キリスト教の創始者であり救い主として理解されている。しかし結論から言ってしまうと、イエスは今日見られるような教会を中心としたキリスト教の母体とは見做し得ない。なぜなら彼に帰せらるる主要な語録のことごとくがこれと逆の事を告げているからである。特にマタイの5章43節から48節までにこれが顕著である。

「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたにどんな報いがあるか。徴税人でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟だけに挨拶をしたところで、どんな優れたことをしたことになるか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全なものとなりなさい。」(“マタイによる福音書” 5,43~48)

「隣人を愛し、敵を憎め」というのは、旧約聖書に見られるユダヤ教の教義の一角を占めており、その語句は「隣人を愛せ」の方は、出エジプト記の20章17、18節やレビ記の19章17、18節に見られるし、「敵を憎め」の方は申命記の20章10から18節に見られる。ユダヤ教においてこのような教義が重要であったのは、ユダヤ民族の歴史的背景による。ユダヤ民族がユダヤ民族による国家を形成した期間は、アブラハムから今世紀に入るまで極めて短い間のみであった。彼らは常に少数民族であり、また常に大国に吸収され解体される危機にさらされていたのである。こうした状況においてユダヤ民族をユダヤ民族として維持するためには、その構成員のユダヤ民族という集団への帰属意識を最高度に保たなければならない。それには、まず同邦愛が必要だが、それを劇的に高めるのが敵の存在であり、敵に対する憎悪である。敵という認識は、自己（個人もしくはそれが参加している組織）存在に対する危機感から生じる。したがって、それが自己を構成するものに危害を加えた時、自己及びそれを構成するものの結束は病的にまで強まる。この事は組織運営技術として定番であり、具体的な例を挙げれば太平洋戦争時の日米、朝鮮戦争時及び直後の北朝鮮と韓国、今日のイラク等歴史書をひっくり返せば埃の数と同じぐらいの例が列挙できるだろう。つまり「隣人を愛し、敵を憎め」という教義は、ユダヤ民族がユダヤ民族として維持されるためには不可欠なものだったのである。しかし、イエスは「隣人を愛し、敵を愛せ」と、この教義のパラダイム・シフトを行ってしまった。これはユダヤ教という組織を解体してしまう事に他ならない。実際に、イエスに帰せられている言葉でQやトマスに次のような語句がある。

あなたがたは、わたしが地上に平和を与えるために来たと思うのか。そうではない。わたしはあなたがたに言うておくが、それよりむしろ分裂だ。今から後、一つの家に5人いる

ならば、3人は2人と、2人は3人と対立して分かれるであろうからである。父は子と、子は父と、母は娘と、そして娘は母と、しゅうとめはその嫁と、また嫁はしゅうとめと、対立して分かれるであろう。（“ルカによる福音書” 12,49～53）

⁽³⁵⁾ イエスが言った、「ひょっとすると人々は、私が平和をこの世に投げかけるために来た、と思っているかもしれない。彼らは、私がこの地上に諸々の軛轢一火、剣、争い一を投げかけるために来たことを知らない。というのは、一家に五人いるであろうが、三人は二人と、二人は三人と、父は子と、子は父と衝突し、そして、彼らは単独で立つであろうからである」。（“トマスによる福音書” 語録16）

イエスは少なくとも彼の行動範囲内（ユダヤ）におけるあらゆる組織的なものを廃し、解体を迫ったのである。これはクムラン文書やヨハネ黙示録に見られるような、自己が参加している組織以外のものに対する激しい憎悪とは異なり、イエスの個人主義的な傾向を明示している。それは以前にあげたように、神の国が聞く耳ある者にのみ訪れるとしている事からも明らかである。例えば“種を蒔く人の譬え”や次の譬えなどはこの事を典型的に示している。

「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではなく、天にいます私の父の御心を行う者だけが入るのである。」…中略…「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて、しかもこれらを行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ているであろう。雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけたが、それでいて倒れることはなかった。岩を土台としていたからである。また、わたしのこれらの言葉を聞いても、これらを行わない者は皆、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に似ているであろう。雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけた。すると、それは倒れて、そしてその倒れ方がひどかった。」（“マタイによる福音書” 7,21～27）

これらの事は救済が個人一人一人に委ねられている事、イエスの言葉はそのためのあるきっかけにすぎない事を示している。イエスが人間をはるかに越えて特別な存在ではないとする語句はトマスにおいても見られる。

⁽³⁶⁾ トマスが彼に言った、「先生、私の口は、あなたがどのような方でいらっしゃるのかをまったく言うことができません」。

イエスが言った、「私はあなたの先生ではない。私が番をしてきたふつつつとわく泉に酔ってしまっているのは、あなたが飲んだからである」。（“トマスによる福音書” 語録13,4～5）

つまり、イエスの思想において神への信仰というものは、何者を通じてという事ではなく、各個人が直接神と一対一で向き合う事なのである。次の正典の文章はQには入っていないが、この事を示唆しているように思われる。

「祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであってはならない。偽善者たちは、人に見てもらおうと会堂や大通りの角にたって祈りたがる。はっきり言っておく、彼らは既に報

いを受けている。だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる。…」(“マタイによる福音書” 6,5~6)

このようなイエスの個人主義的思想は、教会内においてのみ救済が訪れるとしたカトリックとはそぐわない。そもそもQなどのイエスの話録と見なされているもので建造物としての教会を示唆しているものは一つもない。むしろ、ヘレニズム中期以降、多数成立した諸宗教運動に近いものがあり、したがってキリスト教が組織的な体制において量的拡大をはたした要因を彼に帰す事はできない。

(3) パウロ書簡

パウロ書簡において一貫としてみられるテーマは、割礼を筆頭とする律法に関しての事である。特にこれが顕著なのがローマ書とガラテヤ書とフィリピ書である。パウロが伝道活動をしていた時代はキリスト教の一つの分岐点であった。というのは、キリスト教があくまでもユダヤ教の一分派にとどまるか、それともユダヤ人をこえて新宗教を形成するかについて原始教会においてもめたからである。この動きに関しては“使徒言行録”の次の記事が伝えている。

さて、使徒たちとユダヤにいる兄弟たちは、異邦人も神の言葉を受け入れた事を耳にした。ペトロがエルサレムに上って来たとき、割礼を受けている者たちは彼を非難して、「あなたが割礼を受けていない者たちのところへ行き、一緒に食事した」と言った。(“使徒言行録” 11,1~3)

またパウロ書簡においても、

神は人を分け隔てなさいません。実際、そのおもだった人たちは、わたしにどんな義務も負わせませんでした。それどころか、彼らは、ペトロには割礼を受けていない人々に対する福音が任されたように、わたしには割礼を受けていない人々に対する福音が任されていることを知りました。…中略…また、彼らはわたしに与えられた恵みを認め、ヤコブとケファとヨハネ、つまり柱と目されるおもだった人たちは、わたしとバルナバに一致のしるしとして右手を差し出しました。それで、わたしたちは異邦人へ、彼らは割礼を受けた人々のところに行くことになったのです。…中略…さて、ケファがアンティオキアに来たとき、非難すべきところがあったので、わたしは面と向かって反対しました。なぜなら、ケファは、ヤコブのもとから人々が来るまでは、異邦人と一緒に食事をしていただけなのに、彼らがやって来ると、割礼を受けている者たちを恐れてしり込みし、身を引こうとしましたからです。そして、ほかのユダヤ人も、ケファと一緒にこのような心にもないことを行い、バルナバさえも彼らの見せかけの行いに引きずり込まれてしまいました。(“ガラテヤの信徒への手紙” 2,6~13)

という記事がある。ガラテヤ書のこの記事は伝道活動の範囲、つまり最終的にキリスト教がユダヤ教に留まるかどうかという問題で使徒の間で対立が生じていたことを示している。パウロ

自身はこのイエスに始まる宗教運動をすでにユダヤ教から独立した新宗教として捉えていたようである。というのは、同じパウロ書簡のフィリピ書に次のような記事が記されているからである。

あの犬どもに注意しなさい。よこしまな働き手たちに気をつけなさい。切り傷にすぎない割礼を持つ者たちを警戒しなさい。彼らではなく、わたしたちこそ真の割礼を受けた者です。わたしたちは神の霊によって礼拝し、キリスト・イエスを誇りとし、肉に頼らないからです。…中略…わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくと見なしています。キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです。（“フィリピの信徒への手紙” 3,2～9）

これまでの引用文からパウロが異邦人を中心に伝道し、キリスト運動を全く新しい宗教運動と見なしていたのは明白である。しかし、これにはユダヤ教の律法をどう解釈するか、またどれだけその持つ特異性、つまり民族性をうすめ教義を普遍化できるかが、最大の重要課題であった。パウロは、アブラハムが割礼を受ける前に祝福されていることを受け、肉による割礼ではなく霊による割礼こそが重要であると、ローマ書やガラテヤ書やフィリピ書において何度も強調している。それはこの事こそ彼の伝道活動の量的拡大を決定づけるものであり、彼の教義の中核をなすものだからである。

さてパウロ書簡の中にはこの律法の問題の他に、イエスの思想では存在しなかった、十字架と復活、教会などの教義が見られる。十字架と復活の思想は、イエス語録の中には存在しない事から、これがイエスの生涯をみた彼の直接的な弟子達の宗教的なインスピレーションから生まれた事は想像に難くない。したがってこれはパウロが生み出した教義ではなく、彼が改宗した時にはすでにあるグループ内で教義として成立していたものと思われる。いずれにせよこれがパウロの教義においても中核を占めている。また教会に関してはローマ書12章、コリント第一文書12章において言及されている。ここでは教会を身体に例えており、与えられた役割を忠実にこなすように指示している。つまり使徒は使徒として、預言者は預言者として、教師は教師として、援助する者は援助する者として、管理する者は管理する者としてふるまうようにと。これには当時の教会内においてすでに後世の位階制度の原形を見出す事ができる。つまりパウロ書簡には今日のカトリックに結びつくものが多く存在しているのである。

しかし一般的にパウロに直接帰せられている文書には、基本的に教会に関する記事は重要な位置を占めてはいない。例外的なのはコリント第一文書11章の主の晩餐の記述だけだろう。それもあくまでも晩餐に自分がふさわしいか省みさせるための倫理的展開によって言及されているニュアンスが強い。むしろこうした教会の重要性が強調されているのは、エフェソ書、コロサイ書、テモテ書、テトス書などのパウロの名による書簡とされているものである。コロサイ書では、それまで一貫として主のみ仕えるとしていたパウロが、⁽³⁷⁾教会に仕えると述べて

いる。つまりコロサイ書の著者がキリスト教会を同定しているのである。また、ヘブライ書ではイエスと大祭司として同じく教会と同定している。またテトス書には、次のような記事もある。

愚かな議論、系図の詮索、争い、律法についての論議を避けなさい。それらは無益で、むなしなものだからです。分裂を引き起こす人には一、二度訓戒し、従わなければ、かわりを持たないようにしなさい。（“テトスへの手紙” 3,9～10）

これはルカとマタイのイエスの系図記事のくいちがいに見られるような伝承のくいちがいや教会が地方によって諸派に分裂していた事を著者が知っていた事を示唆しているが、こうした事が深刻化するのにはパウロより以後の時代である（この事は次の章でのべる）。したがって、パウロにおける思想の中核はあくまで割礼のような民族的要素からキリスト教を解放し、その運動を普遍化する事であったと断定しうる。しかし、確かにパウロはキリスト教の普遍化に成功したが、これのみをもってキリスト教の量的拡大の直接的要因の全てとするのは早計である。なぜなら、ヘレニズムの時代において普遍的である事を自任する宗教思想というものは、多数存在していたからである。キリスト教の量的拡大はあくまでそれが教会を中心として組織的な動きという、ヘレニズムの文化的特徴と相容れないものの力と結びつく事によって初めてヨーロッパ世界の冠たる宗教として成功したからである。したがって、パウロのキリスト教を普遍化するための活動のみによってはキリスト教の量的拡大を説明する事はできても、キリスト教のもう一つの成功要因である組織化についてを説明する事はできない。

第4章 キリスト教の量的拡大に見られるユダヤ教的側面

さて、ここまで見てきたように、イエスの思想の個人主義的傾向は今日のキリスト教の直接的母体にはなれない事、またパウロのキリスト教の普遍化は今日のキリスト教の教義の母体を多く含んでおり、十字架と復活の教義などエリート主義に陥らない大衆の宗教として量的拡大に成功したが教会の組織化運動を説明するためには不十分である事、つまりキリスト教のヘレニズム的側面のみでは今日のキリスト教を理解する事が不可能である事は明らかである。そもそも、なぜ個人主義、多様性、普遍性が世界を支配していたヘレニズムの時代で、キリスト教のみが組織的な、つまり教会間の横の連帯の堅密さから生じる運動という明らかに時代に逆行する事柄によって発展しえたのか、初期キリスト教の不可解な点の最たるものである。教父の中には教会を擁護する者が多く存在するが、それらの記事の伝える事は教会の組織化の中でもかなり末期のものであり、その内容はどんぐりの背比べにも似た大都市教会間の権威競争というものである。迫害を受け続けたという、初期キリスト教の歴史的背景を考慮すれば、教会を大規模に組織化する必然性はどこにも見当たらない。権力者から見れば、なまじ組織化された集団の方が、バラバラな集団よりはるかに弾圧しやすいからである。実際、個人主義が顕著なグノーシス派キリスト教は、カトリック教会のそれに比べ遙かに殉教者は少なかった。しかも、何度も強調するように個人主義が全盛であったヘレニズムの時代である。

こうしたキリスト教の非ヘレニズム的側面はどこから生じたのであろうか。この問いに対する答えの糸口がエウセビオスの“教会史”の次の記事に見出す事ができる。

⁽³⁸⁾ステファノス（ステパノ）の殉教後に、ヒエロソリュマ（エルサレム）の教会にたいするユダヤ人自身の手による最初の大迫害が起こった。十二使徒を除くすべての弟子は、ユダヤやサマレイア（サマリヤ）の至る所に散らされた。聖なる文書によれば、中にはフォイニケー（フェニキヤ）や、クプロス（クプロ）、アンティオケイア（アンティオキヤ）まで落ちのびた者もいた。彼らは、信仰の御言を異邦人に分かち与えるほど大胆ではなく、ユダヤ人だけに宣べ伝えた。パウロスも当時依然として教会を荒し廻っており、信者の家々に押し入っては男や女を引きずりだし、獄に引き渡した。（エウセビオス“教会史”II,1）

この記事は、キリスト教の伝道運動が最初はユダヤ教内の一運動としてディアスポラを中心として行われた事を意味す。つまり教会はその形成当初はあくまでユダヤ人によるコミュニティとして成立した事を意味する。“使徒言行録”4章32節から5章11節の記事もこの事を支持している。また、原始教会においてパウロが主流派ではなかったことがパウロ書簡からうかがえる。つまりキリスト教は、パウロが存命していた当時はまだユダヤ教の枠内で活動していた事になる。ユダヤ教とキリスト教との連続性はクラン文書の宗規要覧内にみられる、主の晩餐と同様の儀式的存在や、“ディダケー”と呼ばれるキリスト教のごく初期に起源を持つ文書と、旧約聖書内の“箴言”や旧約外典の“ソロモンの知恵”との文学的類似性からうかがいしれる。このような原始キリスト教の教会を形成したユダヤ人のコミュニティは、各コミュニティ間の交流を重視していた。それは、パウロ書簡の存在や、コリント書で触れられているエルサレム教会への献金についての記事からも明らかである。

こうした民族的コミュニティの横への連帯は、今日の華僑やアメリカのユダヤ系ヒスパニックにおいても見られる。特にユダヤ人のこうしたコミュニティの横への連帯の強固さは、今日まで迫害され続け世界中に散らされたにもかかわらず今日までユダヤ民族として残っている事、世界大戦時にシオニズムの運動を起こした実際にイスラエルという国家を築き上げたしまった事など特筆に価する。キリスト教の原始教会は、こうしたユダヤ人コミュニティの一組織であり、パウロ書簡の記事に見られる人と物の動きの活発さから、パウロの時代において既にこの教会間の横の連帯が完成されていた事が考えられる。

こうした下準備とパウロのキリスト教の普遍化作業が結びつき、はじめて今日のキリスト教の母体となったのである。これらの仮説を総合すると正統派とよばれるキリスト教の成立過程は次のようなものになる。

まず、イエスの殉教に直面した彼の弟子達の一部は、その死から十字架と復活を中核とする宗教的インスピレーションを得て教義を確立し、それをディアスポラを含むユダヤ人社会に広めた。この教義は、ヘレニズムの時代に多く存在した特別の宗教的訓練を必要とするエリート宗教に比べ、大衆の宗教として量的拡大を達成する可能性を持っていた。弟子達の運動により、この教義はユダヤ社会において確実に広まっていき、各地に教会とその教会間のコミュニティが作られていった。こうした中でパウロが登場し、イエスの直後の弟子達の教義からユダヤ教特有の民族的要素を徹底的に排除した。この事と教義の大衆宗教的側面によりキリスト教はユダヤ教の枠を超え、異邦人の中で急速に広まった。こうして新しく誕生したキリスト教徒は、パウロにより普遍化された教義（ヘレニズム的側面）と教会と教会ネットワークを中核とした組織（ユダヤ的側面）という財産を原始キリスト教から引き継いだ。これ以後ローマ帝国の多くの人がキリスト教に入信したためローマ帝国内の格差つまり、都市間の格差が教会の

中で表面化し、教会間による主導権争いが生じた。そして最終的に相対的な力関係によりローマ教会を頂点とするカトリック教会が誕生した。その後カトリック教会はローマ帝国の政治権力と結びつき今日にいたるまでの基盤を確立した。

この仮説はあくまで傍証をもとに組み立てたため直接的な証拠はない。しかしヘレニズムという時代の文化的特徴である個人主義と、正統派キリスト教のとった組織的な教義および活動との間にある断絶を説明するには、極めて蓋然性の高い仮説だと自負している。その理由は、この当時のキリスト教文献において教会組織の確立という重要な動きに対して言及しているものがほとんどないことに由来する。ローマ教会の指導的立場を立証するものとして伝統的にあげられるものにマタイ福音書16章18節の「あなたはペトロ。私はこの岩の上に私の教会を建てて。」というのがある。⁽³⁹⁾これにペトロがローマで最初の司教となり殉教したという伝承とを合わせてローマ教会の指導権を主張するのだが、この種の伝承はヤコブ伝承、トマス伝承、果てはマリア伝承など種々存在する事を考えれば理論の内実性はないに等しい。⁽⁴⁰⁾にもかかわらず、教父の著作による教会や組織の正当性はこの種の使徒伝承に帰せられる事が多い。これらの事実から、彼ら教父がキリスト教の信者として著作を開始した時には、教会及びその組織が既に既成の事実としてすでに確立されていた事と同時に、彼ら教父以前のユダヤ人の著者は、教会が存在し組織が確立されるという事実を（ユダヤ人社会の間では）ごく当たり前の事として自然発生的なものとして考えていた可能性があげられる。実際、教父のほとんど全ては異邦人の出自であり、最も古い教父の一人ユスティノスの著作と、パウロ書簡など最も古いキリスト教文献の成立年代との間には半世紀もの断絶がある。こうした世代間のギャップがキリスト教会の組織化運動の過程という重要な事象に関して今日記録が存在しないという事実を生み出したのではないかと思われる。この仮説は資料が存在しない事や当時の時代状況を説明する上で無理が少ない。だからこそ自分はこの仮説が、物的証拠も論拠も薄弱ながら蓋然性の高いものと主張できる。

キリスト教の成立期に関しては未だ不明確な事が数多く存在する。それはあの時代の資料が、カトリックの全盛期の過程で全てこれによって審判を受けているからである。キリスト教会の都市間による権威闘争に関しては多くの文書が書かれただろうが、今日残っているのはごくわずかにすぎない。またキリスト教外部のキリスト教についての言及も、キリスト教の勢力拡大があまりに急速であったため詳しいものは残っていない。またキリスト教を反駁したケルソスの文書も、今日ではオリゲネスの“ケルソス反駁”からその内容が推測できるぐらいでしかない。こうした、文献資料の著しい欠如が初期キリスト教を謎めいたものにして最大の原因である。この論考ではキリスト教の文献とヘレニズムの文化的特徴と対比しながらすすめ、キリスト教の運動がヘレニズム時代に特徴的な、ヘレニズムの文化的特徴とユダヤ教の文化的特徴の文化的混交において成立した事、にもかかわらずそれがヘレニズム的な世界を新しい世界に刷新してしまった事などを明らかにした。とはいってもこれはあくまで大論としてであり、細かな事をに目を向ければまた別の興味深い問題がでてくるだろう。したがって、このキリスト教の成立期は未だもって広大な研究分野を所持しており、また多くの可能性が内包されている。

第5章 今日の世界に関して

今日の世界は、情報と物質の高速移動化が進み、国家という枠組みは崩壊しつつある。実際、

国家をかかげるにあたって最重要の要素であった内政不干渉はすでに有名無実化している。NGO活動にみられるように国家の代表である政府を介さない国境を越えて協力し行動する市民活動も多くなっている。こうした国家という枠組みの崩壊する中でグローバル・スタンダードといった用語に代表されるような全世界における共通事項を決めようという動きは加速している。代表例として最近京都で行われた環境問題に関する会議があげられる。温暖化という環境問題はすでに一カ国がどうしたところで解決には結びつかない、全世界が一致して行わなければならない問題なのである。こうした国境を越えて解決しなければならない問題はこれからもどんどん出て来るだろう。さしせまっているものでも、増加する人口問題とそれに付随する食料問題、エネルギー資源の確保、居住空間の確保などすべて一つ間違えれば人間という生物の存亡にまで関わってくる問題が山積みしている。旧ユーゴ問題や中近東におけるイスラム諸国とイスラエルの対立など、世界の流れと逆行する問題もいくつか存在するが、世界の流れは明らかにこうした国家や民族といった組織を解体していくものである。

では、その時何をもって世界を測る基準とするのか。具体的にどういったものをグローバル・スタンダードとするのか。今日の世界においてこうしたことの模索はEUやAPECにおいてなされているが解決は遠そうである。日本に限ってみても昨今のアジアの通貨危機から自国を守るために、現在外貨の確保に必死になっている隣国の韓国から資本を引き揚げようと模索している。隣国にまで気が回らない状態でアジア一体に共通認識を確立しようというのは不可能以外の何者でもない。アジアだけでなくヨーロッパでもEUの進展は遅々として進んでいないし、アメリカも京都会議でみられるように自国産業の防衛に力をそそいでいる。これからも明らかのようにまだ国家や民族といった枠組みは解体されつつあるが、解体されきっていない。

こうした今日の世界状況の中でどういったものがグローバル・スタンダードたりえるか。自分はそのイエス語録に見られるような個人主義的思想を見出す。今日と類似した状況であったヘレニズムは、明らかにこの個人主義的思想、多様性の許容、普遍性の三つにより一つの世界観を現出させていたのであり、ローマの成功もこうしたヘレニズムの下敷きがあってこそである。今日、国家という枠組みが解体される中で新しい価値観の創出のために多くの新しい団体が形成されつつあるがそれでは事態の解決には何ら寄与しない。組織に対する埋没は、人間を他者との関係において盲目にする。基本的に組織による犯罪は、個々の人間には実行困難な事を組織を通じて可能にする。その最たるものが戦争である。戦争はその当事者に残虐行為を差別なく行わせる。しかし、その残虐行為を行った個人は、個人の枠内ではそうした行為は良心によって行えない事が多い。南京大虐殺やアウシュビッツで加害側の当事者となった者たちでも、自分の家に帰れば善良な人間であったなんて話はどこにでも転がっている。しかし集団に埋没すればそういった人たちも残虐行為が行えてしまうのである。戦争に比べれば被害規模は小さいが、いじめもほとんどの場合において集団に対する埋没から加害者側となる。

国家という基準によって成立する秩序が崩壊しつつある今、新たに新しい集団を形成してそれに埋没する必然性はどこにもない。むしろ個人が、世界の中に位置する自分を、他者との相対的な関係の中で見つけたし、そしてあくまで個人として行動を自分の判断によって決定すれば、現状より穏やか且つゆるやかな総体としての世界を現出できるのではないか。ヘレニズムにおいて多数存在した、そしてその中の一人であった人間イエスの個人主義的な思想は、その可能性を示しているように思われる。

註

- (1) 唯一の例外がユーゴスラビアのティトー、エジプトのナセル、インドのネールの三者を中核とした第三勢力の動きか。
- (2) W・ウォーカー、「キリスト教史①古代教会」、ヨルダン社、p.20,1.14～p.21,1.9参照
- (3) 最近、巻町で原発問題に関連して住民投票が行われた。そこで、直接民主政と間接民主政との兼合いが議論されたが、民主主義の思想的根幹が構成員全員による行政参加である以上、直接民主政の方がその理想と目的に対する整合性においてより勝っているのは事実である。しかし、現実においては組織の規模が大きければ大きいほど運営面において支障が生じるために機能分担が図られ間接民主政が生み出されたのである。「住民投票は代議員制民主主義の伝統を壊すもの（これに関しては、こうした民主主義の原則を知らない、あるいは忘れた妄言に属するものであると思われるが）」という非難もあるが、政治を町民にリアルに実感させた事で一定の評価が与えられるべきだろう。とはいつても、巻町ではあくまで町民が政策決定への影響力を持ったのみであったが、古代ギリシア・ポリスでは、市民が経・防・政の全てに直接的に参加していた。彼らのポリスとの一体感は、巻町のそれをはるかに凌駕するものであっただろう。
- (4) 確かにヘレニズムにおいてギリシア人と非ギリシア人との区別は希薄化されたが、新たに知識人と大衆という区別がより鮮明化された。「ヘルメス撰集Ⅸ 知性と感性について」4（荒井献、柴田有・訳「ヘルメス文書」朝日出版社、収録）参照
- (5) この経緯については、E・ペイゲルス「ナグ・ハマディ写本」（荒井献、湯本和子・訳、白水社）p.7～38に詳しくのっている。
- (6) ナグ・ハマディ文書に収録されている文書のオリジナルの成立は2～3世紀か。少なくとも“トマスによる福音書”に関しては“オクシリンコス・パピルス”からわかるように2世紀中期までに成立している。ただ、同じくナグ・ハマディ文書の中にある“ヨハネのアポクリュフォン”の三つの異本とベルリン・コーデックスの中に含まれるそれとに見られるように時代の経過にしたがって文章が変化していたりするため、“トマスによる福音書”の他の複数の異本が存在しない限り、オリジナル版の成立の正確な年代を限定する事は難しいだろう。
- (7) 397年のカルタゴ公会議において現行の27書の正経典（カノン）として正式に成立する。
- (8) これは位置的にみてパコミオス修道院だとする説が有力である。E・ペイゲルス「ナグ・ハマディ写本」p.15,1.1～5、「ナグ・ハマディ文書Ⅰ 救济神話」（荒井献、大貫隆、小林稔、筒井賢治・訳、岩波書店）p.VIII,1.3～p.IX,1.2、参照
- (9) 「ナグ・ハマディ文書Ⅰ 救济神話」p.18,1.1～6
- (10) 同p.130,1.3～6
- (11) J.S.クロッペンボルグ、M.W.マイヤー、S.J.パターソン、M.G.スタイハウザー・著、「Q資料・トマス福音書」、日本基督教団出版局、p.186,1.4～6
- (12) 「ヘルメス文書」p.90,1.2～14
- (13) マタイ福音書は今日の研究では最も遅くにかかれた福音書だとされている。この書において「神の国」は全て「天の国」に統一されて書かれている。もしかしたら、神（善）の内在性を強調するグノーシス主義者に対抗するためだったのかもしれない。
- (14) 「Q資料・トマス福音書」p.186,1.16～33
- (15) 「オデュッセイア」（ホメロス著、岩波書店）第一歌、第二歌、参照
- (16) 「ナグ・ハマディ文書Ⅰ 救济神話」p.18～90参照
- (17) ヤルダバオートの事
- (18) “アロゲネス” 50,9
- (19) 本当にパウロの作かは疑わしいとされている
- (20) 「エウセビオス 教会史Ⅰ」（秦剛平・訳、山本書店）p.14,1.4～7
- (21) 「ナグ・ハマディ文書Ⅰ 救济神話」p.32,1.6～p.33,1.7

- (22) 「新約聖書とグノーシス主義」(荒井献・著、岩波書店) p.450,1.1~2
- (23) エンノイアとも言う
- (24) 「新約聖書とグノーシス主義」 p.451,1.19~p.452,1.1
- (25) 父なる神のこと。ヴァレンティノス派は神の表現として“深淵” “沈黙”に象徴させていた。
H.ヨナス「グノーシスの宗教」第八章への補遺2、第一の神の項目を参照
- (26) 「新約聖書とグノーシス主義」 p.452,1.6~7
- (27) 「ヘルメス文書」 p.91,1.7~p.92,1.3
- (28) 「新約聖書とグノーシス主義」 p.450,1.1~7
- (29) 同p.454,1.4~10
- (30) 同p.455,1.3~5
- (31) 「ナグ・ハマディ文書I 救済神話」 p.21,1.2~p.22,1.14
- (32) ここにおいても三一論的な表現がでている。しかし、“ヨハネのアポクリュフォン”において、父・母・子は明確に分けられており、またこの順での従属関係を明示している。したがって三者を同質とする“三体のプロテノイア”やカトリックのような三一論ではない。
- (33) “トマスによる福音書”の語録13にも同様の主旨の事が述べられている。
- (34) 両文書より神話論においてより単純な“魂の救済”のほうが、子なる神を明確に規定しており、この文書がキリスト教の影響を根底から受けていると推測しうる。したがって、神話論の母体としては”ヨハネのアポクリュフォン”のほうが“魂の救済”より早く成立しているものと思われる。
- (35) 「Q資料・トマス福音書」 p.190,1.29~p.191,1.1
- (36) 同p.189,1.22~29
- (37) 「コロサイの信徒への手紙」 1, 25
- (38) 「エウセビオス 教会史①」 p.80,1.8~12
- (39) 今日、ローマ教会がキリスト教世界で主導的立場にあるのは、あの時代に起きた権威競争に勝ち残ったからであり、そしてそれは彼らの政治的手腕に帰せられる部分が大きい(迫害時代の後の信徒の復帰問題等)。
- (40) エウセビオスの教会史においても教会の成立は一種の神話化がされている。

参考文献

- ・「新共同訳 聖書」/日本聖書教会
- ・Karen L.King, *Revelation of the Unknowable God*; with Text, Translation, and Notes to NHC XI, 3 Allogenes (Santa Rosa, CA: Polebridge Press, 1995)
- ・J.S.クロツベルボルク、M.W.マイヤー、S.J.パターソン、M.G.スタイハウザー著「Q資料・トマス福音書」/日本基督教団出版局
- ・荒井献、大貫隆、小林稔、筒井賢治、編訳「ナグ・ハマディ文書I 救済神話」/岩波書店
- ・「聖書外典偽典7・新約外典II」/教文館
- ・「聖書外典偽典別巻・補遺II」/教文館
- ・「中世思想原典集成1」/平凡社
- ・エウセビオス「教会史」/山本書店
- ・ルイ・ブイエ「キリスト教神秘思想史1」/平凡社
- ・W.ウォーカー「キリスト教史1」/ヨルダン社
- ・H.ヨナス「グノーシスの宗教」/人文書院
- ・E.ペイゲルス「ナグ・ハマディ写本」/白水社
- ・荒井献「原始キリスト教とグノーシス主義」/岩波書店
- ・荒井献「新約聖書とグノーシス主義」/岩波書店

- 荒井献「トマスによる福音書」／講談社学術文庫
- 荒井献、柴田有、編訳「ヘルメス文書」／朝日出版社
- 日本聖書学研究所「死海文書」／山本書店
- タキトゥス「年代記」／岩波文庫
- E.ギボン「ローマ帝国衰亡史」／ちくま学芸文庫

(卒論指導教員 延原時行)